

令和 2 年 7 月 14 日現在

機関番号：43934

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K01645

研究課題名（和文）過疎・高齢化する夜神楽の伝承現場から探る後継者確保・育成の方途

研究課題名（英文）The Way to Gather and Train YO-KAGURA Folklore Successors &#8212; From the Field Research on Depopulating and Aging Traditional Scenes

研究代表者

佐々木 昌代（SASAKI, MASAYO）

名古屋女子大学短期大学部・その他部局等・教授

研究者番号：20270150

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：・後継者確保・育成には「子ども神楽」が大きく貢献していた。また、女子の参与が、女性後継者を認めない伝承地域においても、後継者確保に繋がっていた。
 ・新旧ビデオ比較では、もっとも映像を注視し、積極的にコメントするのは20-30歳代の若い祝子・舞子であった。義務的加入に見えた若者が好んで後継者となり、技量の獲得にも高い意欲を持っていることが分かった。
 ・現在の舞が伝承地域に活気が漲っていたときの舞と等しいか否かの判断は、夜神楽に寄せる思いや価値観によって異なっていた。また、その思いや価値観は、彼らに夜神楽の稽古をつけた祖父や父、師匠によって育まれたもので、伝承地域内でも一様ではなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

身体運動文化として後世に伝えるべき民俗芸能は、舞や踊りだけではない。舞や踊りの伝承過程である後継者育成の仕組みも後世に伝えるべき貴重な身体運動文化である。そこに、焦点を当てた研究は少なく、継続して調査研究に取り組んできたところに学術的意義がある。また、多様な世代の後継者が必要である育成の仕組みは、山間僻地では過疎・高齢化、市街地では関心低下によって機能不全に陥り、舞や踊りとともに、衰退の危機にある。そのような衰退の危機に見舞われながらも後継者確保や育成が堅調な地域の状況や取り組みを集約して、伝承に窮している地域へ提供することを企図した本研究の社会的意義は小さくないと考える。

研究成果の概要（英文）：“KODOMO-KAGURA” has made a leading contribution to nurture successors of KAGURA in the scenes. Women’s participation in the preservation society as well as leads to secure successors even where women are not accepted as successors.

From the report of comparative videos’ appreciation, previous and current, workshop held at the KAGURA preservation society, 20s to 30s of HOURI or MAIKO, blessing and dancing persons, pay much more attention to the films and make mostly comments there. Research shows that the members who seemed to be apathy and compulsory willingly become more positive to success it and motivated to acquire the skills.

The judgment whether or not the current dancing is the same as what it was used to be in the traditional communities is different, depending on the thoughts and values of YO-KAGURA members. The thoughts and values of KAGURA successors which are raised by grandfathers, fathers, and masters are different even in the same community.

研究分野：舞踊教育

キーワード：夜神楽 後継者育成・確保 過疎・高齢化 椎葉村 旧東米良村 手割 格付け ビデオ比較

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

宮崎県内の夜神楽の後継者育成の仕組みについては、平成16～18年度に獲得した科学研究費補助金による『宮崎県内における夜神楽の後継者育成の仕組みに関する調査研究』において、以下のように報告した。

- ・夜神楽には、伝承地によって舞に個性（型）があり、それを伝承していく後継者育成の仕組みにも個性（伝承地ごとの特長）がある。
- ・後継者育成の仕組みは、舞の格付け（演目ごとの難易度）と手割（夜神楽執行における演目の役割分担）によって成り立っている。即ち、より難易度の高い演目が手割されることを目指して、後継者が互いに競い合いながら舞の技量を研いて成長するよう仕掛けられているのが育成の仕組みである。
- ・後継者育成の仕組みは、地域コミュニティの構成員を育成する社会装置でもあるが、過疎・高齢化が亢進している伝承地では有効に機能しなくなっている。なぜなら、後継者育成の仕組みが有効に機能し、夜神楽三十三番の演目構成にメリハリを持たせ、伝承地ごとに個性を発揮して夜神楽執行を継続するには、後継者の数の確保は言うまでもなく、幼児から古老に至る多様な世代の後継者が必要だからである。

以上の調査研究の対象とした夜神楽は、椎葉神楽、諸塚神楽、旧東米良村内神楽（以下、東米良神楽）であるが、何れも山間僻地に伝承されているため、過疎・高齢化に抗して毎年の徹宵の夜神楽執行を保持することが難しい状況におかれていた。そして、前回の調査研究から10年が経過した現在、過疎・高齢化に歯止めが掛からず亢進している状況は一樣であるが、夜神楽伝承における盛衰の状況は伝承地によって一樣ではない。

そこで、過疎・高齢化の亢進により伝承母体の地域コミュニティが縮小している夜神楽で、現在、伝承が以下の状況にある夜神楽について、舞の個性（型）と後継者育成の仕組みの視点より調査し、比較検討することから、夜神楽保持の具体的方途を探究する。

- ア. 毎年の夜神楽を滞ることなく執行でき、なおかつ、地域コミュニティに活力が漲っていた時代に保持していた舞を現在も変わらず披露できていると地域住民からみなされている。
- イ. 毎年の夜神楽を滞ることなく執行できているが、地域コミュニティに活力が漲っていた時代に保持していた舞を現在も変わらず披露できていると地域住民からみなされていない。
- ウ. 毎年の夜神楽執行が滞ることがあるが、地域コミュニティに活力が漲っていた時代に保持していた舞を現在も変わらず披露できていると地域住民からみなされている。
- エ. 毎年の夜神楽執行が滞ることがあり、なおかつ、地域コミュニティに活力が漲っていた時代に保持していた舞を現在も変わらず披露できていると地域住民からみなされていない。

2. 研究の目的

身体運動文化として後世に伝えるべき夜神楽は、舞だけではない。舞の伝承方法である後継者育成の仕組みも後世に伝えるべき貴重な身体運動文化である。しかし、多様な世代の後継者が必要である育成の仕組みは、過疎・高齢化によって機能不全に陥り、舞も、後継者育成の仕組みも衰退の危機に晒されている。

そこで、過疎・高齢化が等しく亢進しているにも関わらず、夜神楽伝承が堅調な地域と困難な地域について、舞と後継者育成の仕組みの視点より調査し、比較検討することから、夜神楽保持の具体的方途を探ることを本研究の目的とする。

夜神楽伝承の現況に、経年の変化も加味して、比較検討するため、前回の調査研究の対象として舞の映像を含む後継者育成の仕組みに関する資料が残っている夜神楽から、以下の夜神楽を本研究の調査対象とした。ただし、前回の調査研究の対象とした夜神楽で、当ても、現在も、伝承の状況がエ. に相当する夜神楽はなく、椎葉神楽の中からこの10年の間に夜神楽執行が中止もしくは昼神楽としての執行となっている夜神楽を調査対象とする予定であったが、執行中止、地域住民限定での開催などによって調査を実施できなかった。

○伝承の現在の状況がア. に相当すると思われる夜神楽として

- ・梅尾神楽（椎葉神楽）
- ・銀鏡神楽（東米良神楽）
- ・尾八重神楽（東米良神楽）

○伝承の現在の状況がイ. に相当すると思われる夜神楽として

- ・中之又神楽（東米良神楽）

○伝承の現在の状況がウ. に相当すると思われる夜神楽として

- ・追手納神楽（椎葉神楽）

夜神楽保存会は、近似の舞の個性（型）を有する近隣の保存会を除くと、互いに交流することは稀である。しかしながら、夜神楽保存会が連携・協力して伝承母体の地域コミュニティを広げることが後継者の確保、育成に繋がることから、前回及び以降の調査研究から示唆されている。本調査研究が、そのような夜神楽保存会間の連携・協力への切っ掛けとなることも企図している。

3. 研究の方法

1. 前回の調査研究の結果及び資料をもとに、夜神楽ごとの後継者育成の仕組み及び夜神楽執

行状況について再確認し、その変化について明らかにする。

- ・平成16年以降の夜神楽執行状況を確認する。
 - ・平成16年以降の手割を確認し、演目の格付けに変化の有無について分析する。
 - ・後継者（夜神楽保存会メンバー）の属性（年齢、継続年数、居住地、伝承地との関わり、手割された演目）を調べ、前回の調査研究時と比較する。
2. 前回の調査研究で収録した映像と新たに収録する映像を比較して、夜神楽ごとの舞の個性（型）について再確認し、その変化について明らかにする。舞の収録は、記録保存のために全演目を収録するが、分析対象とするのは以下の演目とする。
- ・子どもの舞：銀鏡神楽「花の舞」、追手納神楽「大神神楽」、尾八重神楽「八幡」など子どもが初めて夜神楽で舞う演目
 - ・若者の舞：銀鏡神楽「神崇」、梶尾神楽「かんずい」、中之又神楽「四人神すい」など稽古を積んできた若者が夜神楽で舞うと一人前とみなされる演目
 - ・古老（熟練者）の舞：銀鏡神楽「清山」、追手納神楽「稻荷」など最上の熟練者である師匠級が舞い、後継者が手本とすべき基本の舞でもある演目
3. 前回の調査研究以降、夜神楽ごとに伝承保持のために実施してきた取り組みを明らかにする。
- ・夜神楽保存会から聞き取り調査を行う。
 - ・夜神楽を管轄する教育委員会担当者、地域振興対策担当者から聞き取り調査を行う。
4. 1. ～3. より夜神楽ごとの伝承の状況を把握し、相互に比較することより、過疎・高齢化に抗して夜神楽伝承を保持する方途を具体的に探る。
5. 4. について原案をまとめた上で、それぞれの夜神楽保存会に対して内容確認を行い、報告書を作成、頒布する。これについては、新型コロナウイルス感染症の影響で内容確認のために予定していた出張ができず、中断している。

4. 研究成果

- ・後継者確保・育成には「子ども神楽」が大きく貢献していた。また、女子の参与が、女性後継者を認めない伝承地域においても、後継者確保に繋がっていた。
- ・新旧ビデオ比較では、もっとも映像を注視し、積極的にコメントするのは20-30歳代の若い祝子・舞子であった。義務的加入に見えた若者が好んで後継者となり、技量の獲得にも高い意欲を持っていることが分かった。
- ・現在の舞が伝承地域に活気が漲っていたときの舞と等しいか否かの判断は、夜神楽に寄せる思いや価値観によって異なっていた。また、その思いや価値観は、彼らに夜神楽の稽古をつけた祖父や父、師匠によって育まれたもので、伝承地域内でも一様ではなかった。

【梶尾神楽】

平成16年度の祭当日の映像と今回調査で収録した平成29年度の祭当日の映像を同時に観ながら、重友宮司と照美保存会長と比較・検討した。

「地割（上、中、下）」、「鬼神」、「子ども神楽」、「かんずい」、「振上げ」、「たちから」を比較したところ、舞い方や足運びについて変化や違いは認められなかった。10年余経過しているが、東京から参加するようになった二人の若い祝子を除くと、保存会の構成メンバーに異動はなく、毎年欠かさず夜神楽を執行していて、舞の技量はきちんと伝承されている。

しかし、本来は次の世代の祝子へ受け継がれていくべき演目、例えば振上げ、鬼神などで、安定感のある舞ではあるが、所謂体力、筋力を要する場面で闊達な動きが出にくくなっていた。

小学生の時から一人前の祝子として参加していた大学生に加え、子ども神楽を体験して現在は東京で就職している若い祝子二人が勤務先社長（梶尾出身）の配慮によって祭前の一週間帰省し、稽古を行い、夜神楽に参加している。交通費（レンタカー）、宿泊代（実家がない祝子のホテル代）は保存会が負担しているとのこと。

地元の椎葉村立梶尾小学校が閉校となって久しいが、子ども神楽、子どもの夜神楽参加は継続している。梶尾や椎葉村外へ出たが祝子として夜神楽に参加している父や、子ども神楽を経験した母が、自分の子どもにも夜神楽を経験させたいと祭当日は勿論のこと、稽古にもやって来るとのこと。子ども神楽の存在意味は小さくないと考えていたが、女子についても後継者に繋がるということを改めて確認できた。

【銀鏡神楽】

平成30年10月5日（金）未明、濱砂則康宮司が台風25号の豪雨で崩落した道路から銀鏡川に車ごと転落して亡くなった。前宮司が亡くなる前より保存会の世代交代は進められていたが、令和元年度は改めて新体制が明確になった。

報告者が銀鏡神楽に通い始めた平成9年から今回調査を開始する前頃までは、現在80代となっている祝子が古老や熟練者が舞うとされる「清山」や「綱神楽」の先地の頭を任せられ、格上の演目の太鼓を打っていた。現在70代となっている祝子は「地割」や「綱神楽」を任せられ、中堅以下の祝子が舞うとされる演目の太鼓を打っていた。現在は、総代の奥松氏を除く80代は病気などのために祭の場からも習い（稽古）の場からも身を引き、保存会長の公成氏を含む70代は舞からはほぼ引退して太鼓や笛などの楽を担い、習いの指導に当たっている。よって、舞は20～

60代の祝子に任せられ、太鼓も演目の格に応じて若い世代にも任されている。「西之宮大明神」はもとより、「宿神三宝荒神」などの各神社の社家が保持する面様舞も、80代の父から60代、50代の子息に継がれている。世代交代と共に新しい祝子も増えていた。20代の若い祝子だけでなく、所謂Uターンした50～60代の新加入もある。子どもの頃に「花の舞」を経験して銀鏡神楽の基本を習得していない新加入者は若い祝子と一緒に「初三舞」から稽古をしている。報告者と同世代で、その苦勞は身に染みて分かるが、祭の進行、保存会運営、他の夜神楽との連携などでは貴重な戦力となっているようである。さらに、降居神楽を継いだ武久氏（宿神社武昭氏長男）、とおる氏（六社稲荷神社奥松氏長男）の舞には父子相伝の家持神楽ならではの“奥行き”が見て取れ、社家の継承・育成力の確かさを感じる。

新旧VTR比較では、平成13年度と令和元年度の祭当日の映像について、新宮司久通氏、新宮司を補佐する宮人家の修司氏（地域経済を支える(株)かぐらの里社長でもある）、神職の翔平氏の解説を受けながら、比較・検討した。

保存会長や頭取といった重い立場の長老達にばかり話を聞いてきたことを反省させられた。調査課題に“伝承現場”と掲げながら、そこで奮闘する若い世代にきちんと目も耳も向けてこなかったことを突き付けられた。上手に舞うものの何かが足りないと思っていた翔平氏ら若い世代の舞い振りも、本人のビデオ解説から、若さゆえの経験不足であって、稽古不足でも、決してや意欲不足でもないことがよくよく理解できた。残念であったことは、銀鏡神楽の深く腰を据える基本の型を見事に表現してきた「花の舞」を舞う子どもが減っていることと腰高になっていることであった。「花の舞」の経験が大人の祝子の数と技量に繋がっていくため、危惧される状況と思われる。

【尾八重神楽】

「清山」、「花鬼神」、「四人神崇」、「神和」、「大將軍」、「綱神楽」、「伊勢神楽」、「手力・戸開」などについて、初めて報告者が鑑賞・収録した平成13年度の祭当日の映像と今回調査で収録した平成28年度の祭当日の映像を同時に観ながら、貞夫宮司と比較・検討した。

祝子が少なく限られた人員が多く演目を担って祭を執行してきた時代から、最近子ども達が成長して一人前の祝子として父や祖父の役割を担うようになった尾八重では、家ごとに厳しい習いを行うため伝承に変化や違いはないと考えていた。ところが、尾八重神楽独特の足運びである“先ず爪先で進む先を探った上で一足踏む”ということが十分できていなかった。できているものと思っていたが、改めて新旧画像を並べて注視してみると不十分であった。貞夫宮司の足運びはどこか他の祝子とは違うと予てより感じていたが、ようやく納得できた。それにしても、極めて難しい足運びである。貞夫宮司が習いで徹底すると明言されたが、後日、研究協力者より、祭に向けた習いで足運びの特訓がなされている映像が届いた。

ビデオ分析の際、前年度執筆した論文「教員・保育者養成につなぐ民俗芸能の伝承過程 一宮崎の夜神楽、太鼓踊から」の尾八重神楽の習いを題材に“身につけ方を身につける稽古(習い)”という報告者の主張が、尾八重神楽の“(子や孫の)師匠になるための稽古(習い)”の趣旨をよく理解していると貞夫宮司に認められ、動きの順番を覚えてだけでなく、技量を磨いた舞の伝承に拘って調査研究を続けてきて伝承現場の現実に悩むこともあるが、貞夫宮司の夜神楽に対する強い信念のように揺らぐ進めたいと思われた。また、新旧ビデオ比較に立ち会った貞夫宮司の孫の諒太氏が映像を食い入るように見つめ、貞夫宮司へ舞の型について確認を求め、自身の解釈が師匠である祖父のそれと合致していると分かると実に満足げであった。神職・神楽の家に生まれた責任感もあろうが、それ以上に舞が好きだから、極めたいから夜神楽に奉仕しているということが強く伝わってきた。貞夫宮司の育みの賜物である。

【中之又神楽】

保存会長である中武裕次氏は、氏の父中武福男氏が中心となって舞の伝承を堅調に保っていた時代と比較して、現在伝承されている舞の質が低下していること、即ち、「極める」舞ではなく、「覚える」舞ですらなく、「覚えていない」舞でも神屋に上げ、後継者確保のみに止まっていることに不安を隠さないが、師匠でもある父より受け継いだ舞の技量と共に夜神楽に寄せる思いの深さが見て取れた。

後継者確保として、真剣に後継者になろうと稽古に通っている山村留学生OB・OGがいること、進学・就職で地域外へ出た者の中から壮年になってUターンして夜神楽に加わっていることが、報告者の想像以上に夜神楽伝承の力になっていると分かった。また、閉校になった旧木城町立中之又小学校に勤務していたことから中之又神楽の後継者に加わり、現在では、実質的な支柱として認められ、頼りにされている存在が崎田茂樹氏であることも改めて確認できた。山村留学生OB・OGは恒久的な中之又神楽の後継者になることまでは希望していないと考えていたが、崎田氏によると、平成28年度の夜神楽で「四人神すい」を舞った若者達のように、持続的に稽古を積んで後継者となる意思をもって舞える番付を増やしていこうとしているOB・OGもいるとのこと。山村留学生OB・OGの中から恒久的な後継者になろうという若者が出るのは、神楽を中之又の生活の中で体験し、そこから離れ難い夜神楽や中之又の魅力を体得したためではないかと思われた。

中之又神社の大祭と共に各地区の鹿倉まつりが前回調査時には非常に賑わっていたが、現在は寂れつつあり、その原因は賄の衰退であると中之又神社宮司夫人の千草氏より聞かれた。夜神楽

を盛り立てる振る舞い料理を担う地域の婦人グループによる食品加工部などが維持されている
かないかということも、夜神楽伝承に影響していることが理解できた。

保存会長の中武裕次氏に、平成 17 年度及び平成 28 年度の祭当日の映像を比較しながら、主に手割の考え方、舞の特徴について解説を受けた。前回調査で世話になった裕次氏の父で当時の保存会長であった福男氏と同様、非常に丁寧に演目ごとの舞の特徴や手割の本来あるべき姿、現在の手割の方針、保存会の現況などについて解説を受けた。国の重要無形民俗文化財指定へ向けた「米良山の神楽」調査に当たって保存会長が「知らない」では恥ずかしいので、父の福男氏やベテラン祝子に改めて確認したとのこと。裕次氏の解説を耳にしながら、中之又神楽の映像を観ると、“しおらしい”と表される柔らかく繋がる舞の特徴が理解でき、習い（稽古）が厳粛に行われていた頃は銀鏡神楽や尾八重神楽と共に素晴らしい“東米良の神楽”の特徴を発揮していたことが理解できた。

平成 17 年度は、多くの山村留学生の子どもを舞わせるため、裕次氏曰「掟破り」の演目構成になっている。平成 28 年度は、昼神楽にしたいとの意向（後に取り止め）で祭の執行開始が早まり、伝統や神様事が疎かになっている場面がある。保存会内では、本来のあるべき夜神楽執行に拘る保存会長やベテラン組と、観客がより楽しめる演目構成と願祝子を増やすために手割を工夫していこうと考える組があるとのこと。中之又の舞の特徴を身に付けていない、舞の手順を覚えていない舞い手が神屋に上がっている場面をみるに、保存会長やベテラン組に与したいとも思われるが、一方で、子どもに興味を沸かせる手割によって山村留学生 OB・OG が後継者となっている現実も評価したい。

【追手納神楽】

平成 18 年末現在での尾手納の総世帯数は 18 戸であるが、これまでは各戸を順に巡って神楽宿として開催することが本来の姿であった。例えば災害などで民家が使用できず公民館で開催される場合も、巡ってきた家の戸主が宿主として夜神楽執行のすべてを取り仕切ってきた。しかし、平成 18 年度に夜神楽を執行する設備が整った新しい公民館が落成し、平成 19 年度よりこれまでの宿仕切を止めて地域住民の全体責任で執行する部落仕切となることが住民の話し合いによって決定された。

尾手納を含む尾向地区は、椎葉村内でも奥まった山間に位置しているが、若者が大勢帰って来て留まっていることで知られている。尾手納は、子ども達は地元の椎葉村立尾向小学校には約 2 時間ほど歩いて通学できるが、中学校は村の中心部での寄宿舎生活、高校進学は村外に出なければならぬような、生活に利便なところではない。しかし、生まれ故郷である尾手納に戻って、結婚、出産、育児と共に夜神楽の後継者となることを希望する若者が多い。よって、小学校 6 年生までの子ども達は、男子も女子も、舞と太鼓の両方の稽古をする。特に長男は、高校を卒業すると必ず戻ってくると言われる。他の尾向 3 地区でも同様に若者が戻って、地域と夜神楽の後継者となっている。なぜ戻って来るのかを若者達本人に尋ねても「皆が帰るから」という程度 of 回答しか得られないが、調査を深め、なにがしかの示唆を得たいところである。

椎葉村立尾向小学校校長の外山健一郎氏によると、小学校の HP にも謳われているが、自然と伝統文化に恵まれた環境にあって、学校・家庭・地域が一体となって子ども達を教育しているとのこと。また、村外から赴任してくる教員（校長は除く）は夜神楽の舞台に立つことになっているが、子ども達と同様、地区の神楽保存会に所属し、教員ではなく地区（学校のある尾前）住民として先輩祝子や師匠より神楽を習う。校長という立場で村内住民と関わると、子どもには所謂偏差値の高い学校へ進学するための学力より、一旦は村外へ出てもやがて地元に戻って家や地区を盛り立ててくれることを願い、夜神楽、焼畑などの伝統文化を資源に観光客を呼び込むとしても住民本来の生活を犠牲にしてまでは望まない、といった考えが共通にあると感じること。

最後の宿（椎葉成記氏宅）回しによって行われた平成 18 年度の祭当日の映像と平成 29 年度の祭当日の映像を同時に観ながら、繁則保存会長、信男太夫、仲司（二人）と比較・検討した。

「一神楽」、「扇の手」、「ちんち」、「稲荷神楽」、「かんしん」を比較したところ、舞い方や足運び（行き地：イキジ）について変化や違いは特には認められなかった。しかし、本来は師匠に準ずるベテラン舞子が舞う稲荷神楽において、初めて割付された舞子が型という点では十であるものの、二人舞としての舞い巡という点では十分な熟練度を発揮できていない場面もみられた。稽古が厳格であるとの印相が強い追手納神楽としては珍しいことである。

指導的立場にある保存会長、師匠、仲司は、旧来の“技を盗む（具体的に指導されず、駄目だしをされ、見て学び自分で工夫して認めてもらう）”稽古から指導する側が具体的に丁寧に教えていく稽古に転換すると共に、認められた舞子を割付するのではなく、割付して若年の舞子に責任を持たせることで技量を身につける意欲を引き出すようにしているとのこと。若者が舞子として参加しやすいが、熟練者の深みのある舞、夜神楽全体の番付の奥行は醸し出され難くなるかとも思われる。

神楽囃子について、映像から頻度も囃子の質も低下していることが話題になった。信男太夫が「一人神楽」を舞いながら絶妙のタイミングで囃子がかかると一瞬“我を忘れる”と話されたが、特別な舞の境地に至る瞬間のことであると思われる。面をつけただけで“神がいる”と地域の人々が手を合わせた先代太夫（信男太夫の父）を意識して、舞を磨くことに精進している信男太夫の言葉より、神楽囃子の衰退は夜神楽の舞の衰退にも繋がるということを改めて実感した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 佐々木昌代 眞崎雅子	4. 巻 第64号
2. 論文標題 教員・保育者養成につなぐ民俗芸能の伝承過程 - 宮崎の夜神楽、太鼓踊から -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 名古屋女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 139-148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 生田浩	4. 巻 68
2. 論文標題 米良山中、尾八重神楽の概要と現況	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 民俗芸能研究	6. 最初と最後の頁 51-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 佐々木昌代
2. 発表標題 宮崎県椎葉村尾向地区の夜神楽伝承の特徴
3. 学会等名 日本民俗史学会中部支部10月例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐々木昌代
2. 発表標題 東“米良山の神楽”の祭の個性と後継者育成の仕組み - 尾八重神楽と銀鏡神楽を中心に -
3. 学会等名 日本民俗史学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐々木昌代
2. 発表標題 夜神楽の舞と後継者育成の仕組み 銀鏡神楽を中心に
3. 学会等名 平成29年度民俗芸能学会大会 椎葉村大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 生田浩
2. 発表標題 烏天狗と御霊送り
3. 学会等名 平成29年度民俗芸能学会大会 椎葉村大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	眞崎 雅子 (MASAKI MASAKO) (10714925)	名古屋女子大学・文学部・准教授 (33915)	
研究分担者	倉田 梓 (KURATA AZUSA) (30780861)	名古屋女子大学・文学部・助教 (33915)	
研究分担者	豊永 洵子 (TOYONAGA JUNKO) (50780566)	名古屋女子大学・文学部・助教 (33915)	